

健康な心と体を育むための援助の工夫

～ 体を動かして遊ぶことを通して ～

那覇市立城北幼稚園教諭 出原 綾子

I テーマ設定の理由

現代社会において、幼児を取り巻く環境である地域社会は刻々と変化し、日々の生活においては子どもを狙った事件が頻繁に起こり、戸外で遊ばせることが困難な社会状況になってきている。また、幼児期から習い事や塾に通ったり、テレビやゲームに夢中になったりする幼児が増えてきており、友達と戸外で思い切り体を動かして遊ぶ経験が減少している。そのため、人とのかかわりも希薄になり感情体験が少なくなっていると思われる。また、家庭における幼児の生活の変化、生活リズムの乱れから、朝食の欠食、朝元気がない、外で遊びたがらない、疲れやすい、などの幼児が増えてきている。

今日、教育の在り方として、「生きる力」の育成が求められている。そして、国際化、情報化など社会の様々な変化へ対応しうる次世代を切り拓く心豊かでたくましい人間を育成することが重要である。

幼稚園教育要領には「幼児期は人間形成の基礎を培う大事な時期である。幼児は遊びを通して総合的な発達が促され、遊びにおいて主体的な力が発揮され、様々なものや人とのかかわりを深める等の体験を通して、自ら自分を取り巻く世界を知り、生きる力の基礎とも言うべき生きる喜びを体験するのである。」と示されている。また、幼稚園教育の目標達成の基盤になるものが心身の健康であることを踏まえ、幼児は、生活リズムを整えながら体を動かして遊ぶ体験を通して、挑戦する意欲、集中力、忍耐力、リズム感、バランス感覚、チームワーク等を身に付けて、健康な心と体を育てていくと考えられる。

しかし、これまでの自分自身の保育を振り返ってみると、幼児一人ひとりをしっかり理解し適切な援助をしていたであろうか、生活リズムが乱れがちな幼児や、室内遊びが好きで戸外遊びの楽しさを知らない幼児に対し、健やかな発達に向けて適切な援助をしていたであろうか、十分に体を動かして遊ぶための環境作りをしていたであろうか、と多くの反省がある。

そこで、2ヵ年保育の教育課程と実際の幼児の姿をふまえ、幼児が体を動かして遊ぶことを通して望ましい心身の発達を促していきたい。そのための環境や援助の工夫を研究したいと考え、本研究テーマを設定した。

II 研究目標

心と体が健康な幼児の育成を目指して、体を動かして遊ぶ楽しさを体験できるような環境の工夫及び援助のあり方を研究する。

III 研究仮説

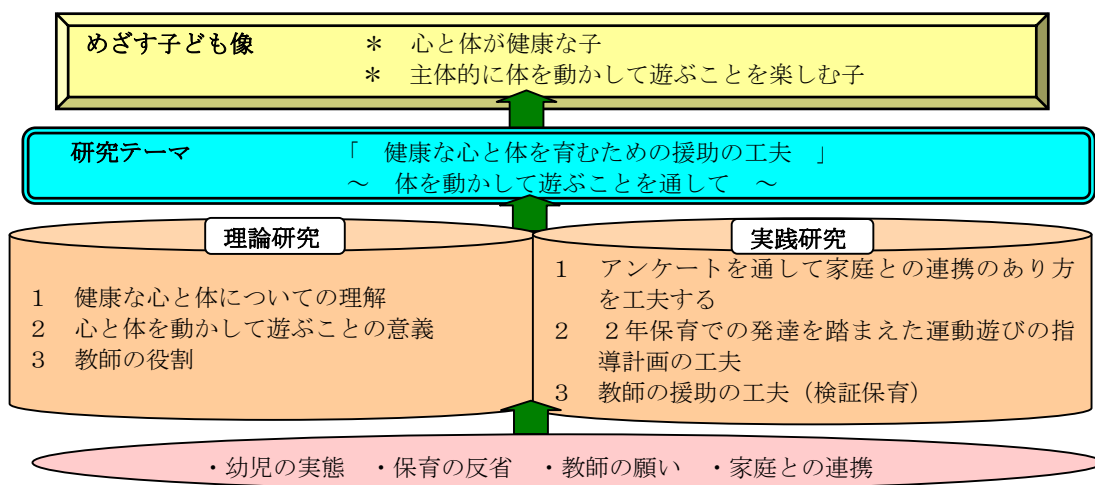
1 基本仮説

遊びの中で、幼児が主体性をもち友達と一緒に体を動かして遊ぶ楽しさを体験できるよう、協同的な遊びを取り入れ、環境構成や援助の工夫を視点に2年保育の年間指導計画の作成を行い保育実践をすることで、しなやかな心と元気な体をもつ幼児が育つであろう。

2 作業仮説

- (1) ダンボールを利用した遊びの中で、イメージが膨らむような声かけや援助を行い遊びを展開することによって、興味や関心をもたせ体を動かした遊びが楽しめるようになるであろう。
- (2) 運動遊びを通して、教師が援助及び環境の工夫をすることで、幼児は安心感や安定感をもち友達とかかわり、体を動かして遊ぶ楽しさを味わうことができるであろう。
- (3) 安心して遊べる遊具や、体を使って遊ぶことに関心が持てる「がんばりカード」の活用によって、教師が幼児一人ひとりの意欲を高める言葉かけや発問等を多くすることにより、主体的に体を動かして遊ぶ子どもに育つであろう。

IV 研究構想図



V 研究内容

1 幼児の健康な心と体についての理解

幼児期における心と体の健康は、体だけを鍛えれば健康な幼児に育つかというとはそうではなく、まず教師や友達など周囲の温かい触れ合いのなかで安定感をもって生活することによって育まれる。その安定感とは、幼児が丸ごとの自分を受けとめてもらい、見守られているという心の平安、安心を意味するものと考え。そこで、心の安定を得るためには教師との信頼関係をしっかり築くことが大切となる。信頼関係を築くことができれば、自ら活動する力、行動意欲が幼児の中に芽生える。そして、様々なものや人と関わるなかで、自己が育ち健やかに成長していけると考える。

幼児の活動はいわば車の両輪のようにではないかと考える。片方が心、片方が体とするならば、双方が一緒に動き出すことによって初めて前進し密接な関係をもちながら成長していくのである。つまり心と体が互いに応答し合いながら一つになって育っていくものと考え。

2 心と体を動かして遊ぶことの意義

幼児は「体を通して理解する」といわれるように、全身で楽しさや運動遊びの難しさを感じ取っている。遊びは幼児の表現活動そのものでもあり、湯川秀樹は「幼児の心と体をバランスよくつなげ、一体化するものである。遊び込む事によって、幼児の心と体の結び

つきはいつそう強められていくのである。」(『幼稚園じほう』2003 第4号 p.15)と述べている。これを図1で示した。

幼児は興味をもった遊びに夢中になって取り組む中で、心を動かし体を動かしていく。自分の思いを実現しようと、能動的に活動することは豊かな遊びとなり幼児の身体諸機能の発達を促していく。

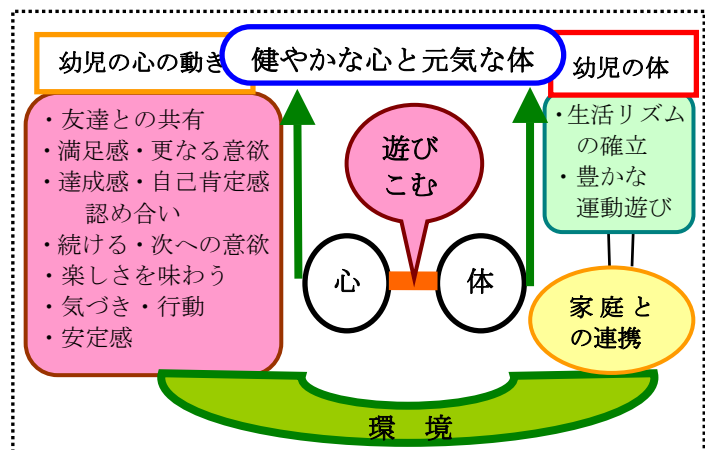


図1 幼児の心と体を育む遊びと健康の関係

3 教師の役割

○ 温かく受け止め、内面理解をする

一人ひとりの幼児が教師に受けとめられていることを実感できるよう、信頼関係を築きながら心の安定感をもたせていくことが重要である。そして、教師は幼児の心のよりどころとなり心の居場所を幼稚園の中でしっかりと築いていく。

そして、幼児の目の高さで幼児なりの動きをよく見て、気持ちに共感し、幼児のありのままの姿を認めていくことが内面理解をすることになる。教師に認められた幼児は、自信をもち更に積極的に体を動かす活動に取り組むようになる。

○ 一緒に遊ぶ

教師自身が遊びのおもしろさや特性を十分把握し、一緒に遊びを楽しむことが大切である。共に動きながら幼児の興味や関心を探り、ルール作りや集中して遊ぶための工夫などを幼児と共に創りあげていく。また、教師は幼児が遊びに夢中になったら、早い時期に主導権を幼児側に移行していくようにすることも念頭に置き、体を動かして積極的に遊びに参加することが幼児の遊びを豊かにしていく。

○ 一人ひとりに応じた指導をする

幼児のこれまでの家庭環境や心身の発達、経験の違いなどの個人差を考慮して、それぞれの幼児に合った援助を見つけ出していくことが大切である。そのうえで、ねらいや内容、具体的な環境の構成を考え保育実践をしていく。そして、遊びの実態記録を活用し幼児が経験していることから育ちつつある力を見とり、援助の方向性を見いだしていく。

○ 遊びのモデルになる

教師が楽しそうに体を動かして遊んでいる姿は、幼児を引き付け活動意欲を触発し動きを引き出す。また、基本となる遊びや運動の仕方を展開したり遊びを発展させるきっかけを作ったり、課題やトラブルの解決の仕方など生活全てにおけるかかわりの手本になる。

○ 意図的・計画的な環境づくり

教師は、幼児が自然に体を動かしたくなるような意図的、計画的な環境を考え構成していく。その際、幼児の動線に配慮した園庭や遊具の配置などを工夫し、幼児の実態や気持ちに添いながら、幼児と一緒に環境の再構成の工夫をする必要がある。

○ 仲間をつなぐ

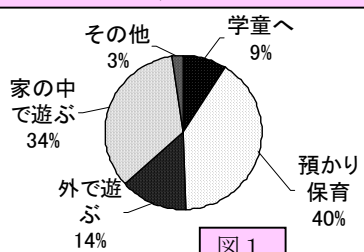
教師は幼児同士のかかわりを客観的に見て、柔軟に対応していくことが大切である。幼児が友達との葛藤、自己発揮や自己抑制を繰り返しトラブルや仲直りも経験しながら成長する過程において、教師は、それぞれの幼児の気持ちを受け止め互いの気持ちを整理し、仲間意識を高めていけるような援助の工夫が必要である。また、一人ではできない遊びを友達と力を合わせたり、役割を分担したり仲間と共に取り組む協同的な遊びを取り入れることが重要である。

4 実態把握・アンケートの結果と考察

(1) 本園の幼児の実態・・・アンケート実施（回答率70%）

幼児の降園後や休日の過ごし方、体を動かすことについての保護者の意識を把握するためアンケート調査を行った。

① 降園後はどのように過ごしていますか？

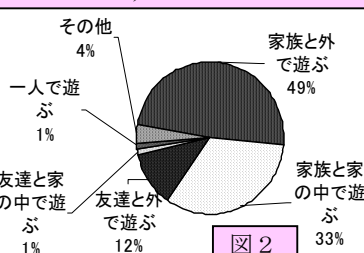


【 ① の結果 】

預かり保育や学童へ行く幼児が半数いる。帰宅する幼児も全体の34%は家の中で過ごしている。遊びの傾向として戸外より室内遊びの方が静的な活動が多いので、降園後体を動かして遊ぶことが少ないだろうと思われる。

預かり保育では、午後3時から4時の間は戸外で体を動かして遊ぶことが多く、エネルギーを消費しているので食欲も湧く。

② 休日はどのように過ごしていますか？

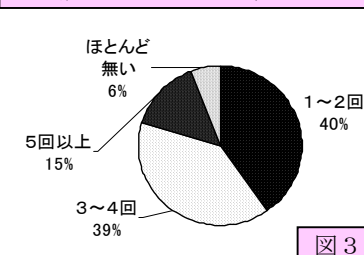


【 ②～④の結果 】

休日の過ごし方は、家の中で過ごす幼児が34%いる。家族と外で遊ぶ幼児が約5割おり、室内より戸外での活動が体を動かして遊んでいる傾向にある。（図2）

1ヶ月の間に親子でどれくらい体を動かして遊んでいるかという質問に、5回以上一緒に遊んでいるという回答が15%。しかし、1～2回という回答が40%であり、親子で体を動かして遊ぶ経験が少ないことが分かる。（図3）

③ 1か月の間に親子でどれくらい体を動かして遊んでいますか？



【 ①～④の考察 】

アンケート結果から降園後、帰宅する幼児の約7割が家の中で過ごしていることや、休日も全体の34%は家の中で過ごすことから、友達と関わりながら体を動かして遊べる時間、空間の保障がある幼稚園の役割の大きさを感ずる。

【アンケートの結果：保護者の意見】

⑤最近の子ども達の体力低下の原因について

外遊びが減ったこと。
外で安心して遊ばせる環境が減った。
室内遊びが多くなった（テレビゲームなどの普及）。
子ども達だけで外で遊ばせる事に不安感がある。
塾や習い事をする時間が増えた。
車社会になり危険性が増したことや歩かなくなった。
周りに友達がいない。
食事（偏食、食生活の変化）など

⑥体を動かす事に関して家庭で気をつけていることや実際に行っていることについて

なるべく車を使わず徒歩を心がけている。階段を利用する。意識的に公園へ連れて行き遊ばせている。散歩をしている。自宅の庭や近所で自転車や縄跳びで遊ばせている。お手伝いをさせている。家の中にいてもできる運動あそびを取り入れている。気軽にできる運動を促す(縄跳びなど)。友達と遊ぶ時間や空間をできるだけ作るようにしている。少々危ないと思うこともできるだけ本人にさせ見守るようにしている。休日でも決まった時刻に起きている。一緒に遊ぶ。何が危険なのかを話し、回避の方法を知らせている(転び方や遊具の使い方等)。など

【 ⑤⑥の考察 】

保護者も幼児の体力低下について認識し、懸念していると考え。また社会や地域連携の在り方や安心して遊べる公園等の遊び場の確保等も大きな課題と考える。保護者としても幼児にとって体を動かすことの大切さを認識し、日常生活の中で意識的に体を動かそうとしている傾向が見受けられた。思いっきり遊ばせたいものの実際は時間や場の制約がありなかなかできないという意見もあった。今後、より連携を図りながら家庭に向けての情報発信や子育て情報を共有する必要性を感じ

家庭との連携（学級だよりを発行）

保護者の皆様へ

平成20年1月 吉日
城北幼稚園 そら組
出 原 綾 子

そらぐみだより

桜のつばみもかわいらしく咲き始め、春の気配を少し感じる今日この頃、保護者の皆様はいかにお過ごしでしょうか？昨年はお忙しい中子ども達の降園後や休日の過ごし方等についてのアンケート調査にご協力下さりありがとうございました。残り2ヶ月の園生活を、子ども達の健やかな成長のため、保護者の皆様とともに頑張りたいと思います。よろしくお願いいたします。

生活リズムを整えよう！
はやね はやおき あさごはん！

ねるじかん
8:30から9:00までには寝ましょう。光、音の刺激をなくしてテレビを消す。

おさるじかん
6:00から6:30までには起きましょう。

あさごはんのじかん
7:00から7:30までには頂きましょう。

体をいっぱい動かして遊ぼう！

体を動かすことは体力づくり、心づくりになります。学力もアップ、食欲も増進！いいこといっぱい！です。4～5歳以上になると体力がついてきて、朝の運動あそびだけでは足りません。午後に運動遊びをし活動エネルギーを発散させることで夜はぐっすり眠れると言われていますよ。

そこで **親子で楽しもう！**

**心も体もぽっかぽか！
親子でふれあって
親子体操をしよう！**

親子体操は、親子で触れあえてスキンシップをとることでぎずなを深めてくれますよ。

足踏み回り
親が疲れている時も子どもは元気！
そんなとき
○保護者は座って両足を開き、子どもがその足の上を両足踏切で飛び越え一回りします。できたら、片足跳びや横とび、後ろ跳び等に挑戦！

地球一周
おんぶの体勢から保護者の体の周りを一周させる。

平均くずし
(すわりずもう) 両手のひらを使い押ししたり引いたり突いたりして相手のバランスをくずす。

わにの親子
くねくねおじつたりして散歩する。他の動物に変身しても楽しいよ！

学級だよりを発行し、幼児の生活の様子を伝えたり子育て情報を提供したりする事を通して、家庭と相互に連携しながら幼児の育ちを支えていくことが重要と捉える。そこで、親子体操を紹介する内容を盛り込み、学級だよりを配布した。

5 2年保育における体を動かして遊ぶ活動の指導計画（抜粋）

4歳の3月から5歳の4月への発達の連続性を踏まえ、見通しをもち意図的・計画的な年間指導計画を作成し保育を展開することが大切である。経験する活動で幼児のどのような力が育つのかを見とり援助することが重要であると捉え、年間指導計画を作成した。

期	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
4歳児	発達 の 道 筋 ・体を動かして遊ぶことを喜ぶ。 ・簡単なルールのある遊びに喜んで参加するようになる。 ・いろいろな遊びに興味や関心を持ち、自分なりにやってみようとする気持ちがみられる。 ・鉄棒や縄跳び、竹ぼっくり等に取り組みできるようになったことを喜ぶ。 ・年長児の姿を見て憧れを持ち、真似たり積極的に遊びや生活に取り組んだりする。						
	ね ら い ○運動会などの行事を通して集団で活動することを楽しむ。 ○簡単なルールのある遊びを楽しむ。 ○好きな遊びや生活する中で、友達と関わる事の楽しさを味わい自分なりの力を出そうとする。 ○クラスで友達と体を動かして、いっしょに遊ぶ楽しさを知る。 ○進級への期待を持ちながら友達と一緒に生活や遊びを意欲的に進めていこうとする。						
	内 容 ○遊具や用具を使って、いろいろな動きや遊びを楽しむ。 ○教師や友達といっしょに動く楽しさを味わう。 ○身体部位の名称を覚えて体を動かして遊ぶ。 ○簡単なルールを守って教師や友達と一緒に遊ぶ。 ○逃げたり、追いかけたりするスリル感を味わう ○進んで戸外遊びを楽しむ。 ○自分なりに挑戦する気持ちを持って遊ぶ。 ○皆でいっしょに遊ぶ楽しさや、満足感を味わう。						
	環境の構成及び援助 ◇運動会の経験から受けたいろいろな刺激を、幼児の欲求を生かしながら遊びや運動会ごっこなどに取り入れ、みんなで遊ぶ楽しさを味わわせていく。 ◇「登り棒」「うんてい」等、渡れた距離を知るために色テープなどで目印を付け、目標を持ったり、励みになるようにする。 ◇ルールがはっきりわかるもの、繰り返し楽しんで遊べるものなどの活動を、幼児の経験や実態に合わせて選んでいく。 ◇教師も一員として遊びに参加し遊びを盛り上げたり、参加したがない幼児を誘ったりして、どの子にも経験できるように機会を捉えて指導していく。 ◇幼児が自分たちで遊びを進めたり、楽しんでいけるように、場や時間、人数などを配慮していく。 ◇一人ひとりの行動を認め励ましながら、自信を持たせていくことで年長組への期待をもたせるように配慮する。 ◇自分からやってみようとして取り組んでいる姿を認め、共に喜んだり、励まして行く。 ◇幼児同士で誘い合い、刺激し合えるような場を多く設ける。						
活動例							
	4月	5月	6月	7月	8月		
5歳児	発達 の 道 筋 ・年長になった喜びを感じ、これまでの経験を活かし遊ぶ。 ・戸外遊びが活発になり、運動量も多くなる。 ・固定遊具やうんていなどに自分なりに挑戦する。 ・4歳の頃からの自分の課題にチャレンジする姿が見られる。 ・水遊びやプール遊びを喜び友達の刺激を受け目標を持って頑張る。 ・簡単なルールのある遊びを気の合った友達同士で楽しく遊ぶ。						
	ね ら い ○戸外で友達といっしょに体を思いきり動かして遊びを楽しむ。 ○やりたい遊びや、新しい遊びを十分楽しむ。 ○年長組になった喜びと自信をもって生活する。 ○水遊びに進んで参加し、目的を持って取り組む。 ○友達とのつながりを感じながら遊びを進める。						
	内 容 ○遊具や用具の安全な使い方を確認して遊ぶ。 ○積極的に戸外に出て、体を使って遊ぶ心地よさを味わう。 ○4歳児に親しんでかかわる。 ○自分の思いを伝えながら教師や友達とかわかって遊ぶ楽しさを味わう。 ○簡単なルールのある遊びを友達といっしょに楽しむ。 ○自分なりの課題を持って頑張って取り組む。						
	環境の構成及び援助 ◇好きな友達と十分遊べるような時間や場、遊具や用具の種類、量を配慮する。 ◇これまで経験した遊びや遊具を準備し、遊びが継続し深まるようにする。 ◇準備や後片づけなど、自分たちで遊びの場を用意したり、片づけたりできるようにする。 ◇遊びが充実していくように、場や時間を確保しながら必要に応じて関わっていく。 ◇遊具や用具、遊び場の点検を心がけ、幼児と一緒に確認しながら遊ぶ。 ◇取り組んでいこうとする一人一人の姿を認め、各自に合った助言や励ましをし満足感を味わわせていくようにする。 (⇒は3月まで継続)						
活動例							

VI 検証保育

1 題材名 「友達とダンボール遊びを楽しもう！」

2 題材観

廃材（チラシや新聞紙、空き容器、トレー、ダンボールなど）は、幼児にとっては発想によっていろいろ自由に変化させたり工夫したり、イメージできる魅力的な素材である。

ダンボールを使いいろいろなイメージを膨らませて遊んだ経験を踏まえ、幼児が好きな虫をイメージしたキャタピラー遊びをすることで、興味を持ち意欲的に体を動かした遊びを経験することができる。更に、四つんばいになりハイハイ走りをすることは全身運動に繋がると捉える。

また、友達と力を合わせたり励ましたり応援したりしながら友達とのつながりを深め、体を動かす楽しさを共感し合えると考ええる。

3 検証保育までの実践

	幼児の活動の流れ	○ねらい ・ 内容	◎教師の援助 ＊環境構成の工夫
1 回目	『サーキット 遊ぼう！』 ---巧技台・タ イヤを使って	○サーキット遊びを楽しむ。 ・興味を持ち教師と一緒に サーキット作りをする。 ・体を使っていろいろな動きを楽しむ。	◎一緒にサーキットの場を作ったり見せたりしながら興味が持 てるような声かけをする。 ＊いろいろな動きが楽しめるようにタイミングを見て構成を変 えていくようにする。 ◎状況に応じマットを敷く等、安全面に配慮する。
2 回目	『ダンボール を使って遊ば う！』 ---イメージを ふくらませて-	○イメージを膨らませながら、体を動かし て遊ぶ楽しさを味わう ・ダンボールからイメージを膨らませ、体 を使ったいろいろな遊びを楽しむ。(例え ば：船、乗り物(バスなど)、宇宙船、お 家、迷路ごっこ)	◎＊輪になったダンボールを用意し、何に見えるのか？どんな ことに使いたいのか？等、イメージを沸かせるような声かけ をする。 ◎子ども達からのイメージしたものや発想を大事にし、体を動 かした遊びにつながるよう援助する。ない時は、教師が提案。 ◎様々な遊びが楽しめるように教師も関わり一緒に遊ぶ。
3 回目	『トンネルゲ ームをしよう！』 ---ダンボール を使って---	○友達と一緒に体を動かして遊ぶ楽しさやおも しろさを味わう。 ・友達と一緒にダンボールのトンネルを作り四つ んばいになり、くぐったり、ゲームをして楽しむ。	◎前回のイメージ遊びからの発展として、トンネル作りやゲー ムで友達とのつながりを感じながら遊べるよう、その時の気 持ちを言葉に出して表現し、挑戦を促すような声かけをする。 ＊ダンボールトンネルの中は暗くなるので不安がらないように 数カ所に穴を開ける。(パニックにならないよう配慮する。)
4 回目	『キャタピ ラーで遊ぼう！』 -思い切り手や 足を使って- 『カメに変 身！カメレー スだ』	○ 友達と共通のめあてを持ちながら、思い切り 体を動かしてキャタピラー遊びを楽しむ。 ・友達と一緒にイメージを持ちながら、四つんばい になりカメレースやキャタピラー遊びを楽しむ。 ・友達と最後までルールを守りながら体を動かした遊 びを楽しむ。 ・友達や先生と一緒に体操を考えたり、踊ったりして 体を動かして遊ぶ。	◎キャタピラーが上手になる方法として、手や足を強くするに はどのようにしたらよいか幼児の意見やアイデアを受けと める。教師から提案もしてみる。(カメに変身や体操など) ＊カメは予め作っておく。 ◎最後まで楽しめるよう励まし、一人ひとりの取り組む様子を しっかり把握し、声を掛ける。 ◎キャタピラーを媒介にして友達とのつながりを喜び、仲間意 識を感じとれるような声かけをする。
5 回目 本時	『キャタピ ラー遊びをしよう！』	○キャタピラー遊びを通して、友達と 一緒に体を動かして遊ぶ楽しさを味 わう。 ・体を動かして、体操やキャタピラー あそびを友達と一緒に楽しむ。 ・友達や教師と関わりながらルールを 守って遊びを楽しむ。	◎順番を守りながら、友達が頑張っている時はどうしたらいい のか、幼児に問いかけをしルールを確認する。 ◎準備体操を意欲的にできるような声掛けをする。 ◎皆の気持ちを一つにしてキャタピラーあそびが楽しめるよ うな雰囲気づくりを心がける。 ◎前が見えないのであまり急ぐと倒れたりぶつかったりする ので安全面に配慮する。 ◎躊躇している幼児には安心感を持たせるよう声かけをして援 助する。 ◎思い思いに気持ちを言葉で発し表現し、応援する姿を認める。

4 検証保育指導案

(1) ねらい

○キャタピラー遊びを通して、友達と一緒に体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。

(2) 内容

○体を動かしてキャタピラー遊びや体操を友達と一緒に楽しむ。

○友達や教師と関わりながらルールを守って遊びを楽しむ。

(3) 保育仮説…具体的な手だて

○準備体操において、教師と共に音楽に合わせて体を動かす事により、心と体がほぐれ
キャタピラー遊びへの期待感や意欲が膨らむだろう。

○キャタピラー遊びにおいて、幼児が幼児同士のつながりを感じ取れるような援助及び
環境の工夫をすることで、幼児は安心感や安定感を持ち友達とかかわりながら体を動
かして遊ぶ楽しさを味わうことができるであろう。

(4) 保育の展開

時間	・予想される幼児の活動	◎ 教師の援助	* 環境構成
9:30	○好きな遊びを楽しむ ＜園庭＞・短縄・竹馬・や つとこ ・一輪車・フープ・ボール ・竹ぼっくり・集団あそび ・キャタピラー ○片づけをする・トイレへ行く	◎自ら取り組んだり最後まで頑張っている姿を認める。 ◎教師も幼児と一緒に遊びに参加しながら楽しさを共感 する。 ◎挑戦する姿を認め、楽しさやできた時の満足感を味わえ るような声かけをする。 ◎教師も一緒に片付けをしながら、片付けをしている姿を 認めきれいなった心地よさが味わえるような声かけ をする。	*遊具や用具を使いやす いよう整理し、園庭の 場の取り方を工夫す る。 *それぞれの遊びが充分 楽しめるよう安全面 にも配慮する。
9:40	○あつまり(戸外) ・今日の活動について話を 聞く。 ・遊びのルールを知り確認 する。 ○準備体操をする。(園庭) ○キャタピラーあそびの準 備をする。 ・グループで並ぶ。 (2グループ) ○キャタピラーあそびを楽 しむ。(園庭) ・キャタピラーあそびをし ながら友達の応援をした り、かけ声をかけたり歓 声をあげたりする。 ・思い思いに気持ちを言葉 で発したり表現したりす る。 ○合図を聞き片付けをする。 ○手洗い・うがい ○グループで集まる。(室内) ・うた「がんばりまんの うた」を歌う。 ・絵本「からだっていいな」 を見る。 ・今日の活動を振り返る。 ・嬉しかった、頑張ったこ となどを話す。 ～引き継ぎ～	◎気になる幼児に対し、楽しそうにしていたこと、頑張っ た姿を認める言葉かけをし、皆の前でも認め大いに褒め る(友達の受け入れ) ◎昨日や本日前半の活動からの引き続きとして、これから の活動の流れを幼児と一緒に確認し合い、期待感が膨ら むような声かけをする。 ◎順番を守ったり友達が頑張っている時は、どうしたら いいか幼児に問いかけながらルールを確認する。 ◎準備体操で、音楽に合わせて共に体を動かし意欲的になる ような声かけをする。 ◎教師と一緒にキャタピラーやカラーコーン(2個)の準 備ができるよう声かけをする。 (あまり積極的ではない幼児に手伝いをさせることで、よ り参加し楽しめるような意欲を持たせたい。) ◎キャタピラーあそびを終えた幼児が待機する場をきち んと知らせる。(最後まで楽しめるように) ◎皆の気持ちを一つにしてキャタピラーあそびができる ような元気な掛け声をかける(エイエイオー!) ◎前が見えないのであまり急ぐと倒れたりぶつかったり するので安全面に配慮する。 ◎躊躇している幼児には安心感を持たせるよう声かけを し援助する。 ◎1回戦は往復キャタピラー(方向転換させる) 2回戦は、行きはキャタピラーで進み、帰りは両手で持 って帰るなど変化をつけて楽しめるようにする。 ◎思い思いに気持ちを言葉で発し表現したり、応援する姿 を認める。 ◎自分で気づいて行動できた子は認め、褒めてあげよう。 ◎今日の準備体操やキャタピラーあそびをして、幼児が友 達とかかわりながら体を動かして遊べたことで、どのよ うな気持ちになったか、幼児の声を引き出せるような発 問をする。 ◎幼児の思いを受け止めて、頑張っていたところを認めて 友達に伝えていく。 ◎今日の活動から元気な心と体に関心を持ち、他の運動遊 びに挑戦する意欲がでるような声かけを工夫する。 (絵本・「挑戦しよう、やってみよう」を見せながら)	*幼児の動線を考え靴箱 前の広場を利用して、 あつまりができるよう にする。 *準備体操用の曲がすぐ 流せるようCDプレー ヤーをセットしてお く。 *キャタピラーやカラー コーンを出し易いよ うに準備する。 *終えた幼児が待機する 場を決めておく。 *幼児が待機する場に線 がすぐ引けるようライ ン引きを用意してお く。 *タイミングを見てポン ポンを出し易いよう準 備する。 *グループとグループの 間をできるだけ距離を 離す。 (安全面に留意して) *幼児がより意欲的にな れるよう関連した絵本 の読み聞かせをする。 *楽しかったことを共感 し合える雰囲気大切に にする。 *『ちょうせんしようや ってみよう』の自分の めあてを描いた紙を見 易い様提示しておく。 雨天時は・・・ ゆうぎ室を使いキャ タピラーあそびをする。
10:30			

5 評価

(1) 一人ひとりの幼児が友達と一緒に体を動かして楽しく遊ぶことができたか。

(2) 安心感や友達とのつながりを感じ、体を動かして遊ぶ楽しさを味わえるような援助をして
いたか。

VII 結果と考察

1 作業仮説（１） の検証

ダンボールを利用した遊びの中で、イメージが膨らむような声かけや援助をしながら遊びを展開することによって、興味や関心を持ち体を動かした遊びが楽しめるようになるであろう。

【 保育実践 ２回目より 】 「ダンボールを使って遊ぼう！」～イメージをふくらませ～

【 幼児の姿 】 数個のダンボールを見て、「何するの？」と質問する幼児。それー！とばかりに輪の中に入り、お家に見立てて遊ぼうとする幼児。興味は示すものの遠目で見ていた幼児と様々な反応が見られた。

（エピソード）①「大型バスごっこ」

別の遊びをしていた幼児もダンボールを見ると、興味をもちだし関わっていた。ダンボールで遊ぶ際、幼児のこれまでの経験からお家や虫の家などを作り出していた。教師のイメージを引き出す声かけにより、幼児はイメージが広がり、友達と協力しながらダンボールをつなげ大きな輪ができた。7～8人で力と気持ちを合わせて大きなダンボールを持ち抱え「出発！」と体を動かしながら乗り物ごっこ遊びを楽しんだ。また、紙やペんで窓や絵、ハンドル等を描き、自分達の大型バス作りを楽しむ姿もあった。



（エピソード）②「そり遊び」

A児は、床の上でダンボールが滑ることを発見し両手で雑巾がけの時の様に四つんばいになり、すいーっと滑らせて楽しんでいた。また、別のグループでは数名がダンボールをみるとすぐ乗って遊び、それを2人の幼児がダンボールの端を持ち力いっぱい引っ張って、「そりだー」と言って喜んでた。更に引きやすく紐をつけ、援助することで、より勢いをつけながらも相手の安全に気をつけて楽しく遊べる様になっていった。



（エピソード）③「乗り物コーナーでごっこ遊び」

「ここから乗ってね。はい、チケット」そりひきをしていた二人の幼児は、いつの間にか自分達で乗り物コーナーをつくり、紙を切ってチケットを作り、ごっこ遊びを始めた。その様子を見守りながら、「うわー、すごくいい考えね」「せんせいも、乗りたくなっちゃうなー」と大いに認めていく。他児や遊びを傍観していた幼児に対しその様子を知らせていった。見ていた幼児も一人はチケット作りをやりだし数名は待っている列に並んでそり遊びを楽しむことができた。



【 考察 】

（エピソード①より）幼児はダンボールを見るとお家や虫のお家などを作るイメージを持っていた。しかし、教師が『何に見えるかな？』『大きな輪にしてみよう！』などとイメージを膨らませるような発問や声掛けをしながら一緒にかかわると「わー乗り物を作ろう」「みんなで乗れるのがいい」「大型バス！」とイメージを出し合いながら友達と一緒に作る楽しさを味わうことができた。「大型バスに乗ってみよう」と誘いかけ、遊ぶきっかけを作ると、幼児が自分達で大型バスに乗って「出発！」などと言いながらバスごっこ遊びを発展させ、協力し合い遊びを進めることができたと考える。

他の援助として大きな輪の中に「ぎぶーん」と入ってみたりすることからダンボールを使って色々な遊びが展開できることを知らせるようにした。そこから、ダンボールを媒介にしながら幼児は自らダンボール遊びに参加し 体を動かす楽しさを感じ取っていった。

（エピソード①～③より）教師が固定した発想にとらわれず、幼児の発想や思いを汲み取りながらそり遊びや大型バスごっこを楽しむことで、協同性の芽生えが見られ、より体を動かしながら遊びを充実させたと思われる。

2 作業仮説（2） の検証

運動遊びを通して、教師が援助及び環境の工夫をすることで、幼児は安心感や安定感を持ち友達とかかわりながら体を動かして遊ぶ楽しさを味わうことができるであろう。

【手立て】キャタピラーあそびを終えた幼児が待機する場に白線を引く。ポンポンを用意しておくことで友達の取り組む姿を励ましたり、応援したりすることができる。

【検証保育 本時 キャタピラー遊びの場面から】

□ 幼児の姿	教師の援助・環境の工夫
□ キャタピラー遊びを始める前に皆で集まり、これからの活動の流れを確認し合う。 □ 「競争じゃないって」「頑張って最後までやろう」という声が聞こえてきた。	○ これまでの幼児の様子から競争を止め「競争しないでキャタピラー遊びだよ」と声をかける。(運動的な遊びが得意ではない幼児や恥ずかしがり屋の数名の女児が競争あそびになると、意気消沈してしまうことがあったため) ○ 個々のペースや取り組み方を認めることにつながり、安心してキャタピラー遊びが楽しめた。
□ 「さあ、キャタピラーで走るぞー！」と意欲的だったが、やり始めの時は折り返し地点で方向転換に戸惑う子もいた。待っている子はわくわく、そわそわして自分の番が来るのを今か今かと待っていた。 □ 手をたたいたり友達の姿を見ながら「○がんばれー○がんばれー」「もう少しー」と励まし応援していた。	○ 一人ひとりに「上手、上手」「そう、中でグルッと回るんだよ」とアドバイスをする。 ○ 慌てたり戸惑ったりしないよう「白い線の所が応援するところね」と知らせる。「どんどん手を前に出してごらん」「そうそう、その調子」「うわぁー早くなってきた」「○○さんの足の動きが、素早くてかっこいいよ」「すごい」「がんばれーもうすこし！」等の励ましや応援をする言葉をかける。
□ 『楽しい回り方を発見！』いつも面白い発想をするR君、キャタピラーの中で前回りをしながら前進していった。皆から、「Rすごい」「がんばれー」と一層大きい声援があった。	○ 「おもしろい回り方だね」「すごいね」と応援し認めつつ、危険がないか安全面に注意しながら援助する。
□ 走り終わり待っている子がポンポンを持ち応援を始める。すると、より声が大きくなり応援に熱が入った。「○○がんばれ！○○がんばれ！」と友達と声を合わせ、リズムよく一緒に応援し応援側も楽しんでいた。 □ 最後の子が終わると、応援している中から「イエーイ！」とポンポンを投げ上げ一斉に歓声があがった。“べつに競争じゃないよ”と言ってスタートしたが、子ども達の個々の中では競争しながらキャタピラー遊びを楽しんでいた。	○ 空間的環境の工夫として応援用のポンポンを子ども達が応援する場所に用意しておく。
□ 変化がついたことで「よーし」と、より意欲的に楽しめた。応援する方も益々興奮して一緒に楽しんでいた。	○ もっとやりたい気持ちを汲み2回戦を行った。2回戦は折り返しからキャタピラーの輪に入り、持って歩くというルールでやってみようと提案した。



《本日の保育を振り返って》

「キャタピラーをして遊んだことが楽しかった」「ダンボールを持って走れたことが楽しかった」「がんばれーって言われて、うれしかった」と言う幼児に対し教師は「そうだね、応援がなかったら寂しい感じがしたけどお友達が「がんばれー」って言うてくれたら「よし！やるぞー」っていう気持ちになれるよね」と共感する言葉をかけた。「もぐらみたいで、とても楽しかった」「応援するのも楽しかった」という感想があった。

【考察】

応援されることによって、友達や教師に受け入れられている安心感や心地よさ、嬉しさを感じながら友達と一緒に体を動かして遊ぶ楽しさを味わったと考える。

キャタピラー遊びをしているコースの側に、遊び終えた幼児が待機できるよう白線を引くことで、個々の幼児が友達の姿をよく見ながら応援することができた。また、ポンポンの活用で応援にも楽しさが加わり見る側とやる側とが気持ちを一つにしながらかしめたと考える。

列の最後の幼児がゴールをすると、応援団の幼児はポンポンを投げ上げ大喜びをしていた。まさに勝った時の喜びようであった。競争ではないという前提のもと遊び始めたが、競争の要素を含んだ遊びの内容となり、結果としてはチームで競った楽しさや満足感を感じたのではないかと考える。

教師や友達との触れ合いで心を開き、思い切り自分を出し遊べることで、自由な発想を出して前回りしながらキャタピラー遊びをするなど、工夫や発想も幼児自身から自然発生的に出てきたと考える。

キャタピラーでの遊び方に变化をつけたことで、遊びの楽しさが膨らんだ。

3 作業仮説（3） の検証

幼稚園において、安心して遊べる遊具や、体を使って遊ぶことに関心が持てる「がんばりカード」の活用を通して、教師が幼児一人ひとりの意欲を高める言葉かけや発問等を多くすることにより、主体的に体を動かして遊ぶ子どもに育つであろう。

（園の様子）運動会の経験から、園では運動遊びの遊具（縄・竹馬・やっここ・フープ・一輪車など）を環境として設定し、好きな遊びの時間に『がんばりカード』を活用しながら個々の幼児がめあてを持ち取り組んでいた。

【B児の姿を追って】

（B児の様子）

生活リズムがなかなか確立せず、登園が遅くなることが多かった。登園の遅い日は、元気がなく仲の良い友達もいるが、上手く気持ちが通い合わずトラブルになることがあった。運動会後も運動遊びには興味を示さず、自ら取り組む姿があまり見られなかった。発想が豊かでイメージを膨らませて製作活動など静的な遊びを好み楽しんでいた。

□ 幼児の姿

教師の援助・環境の工夫

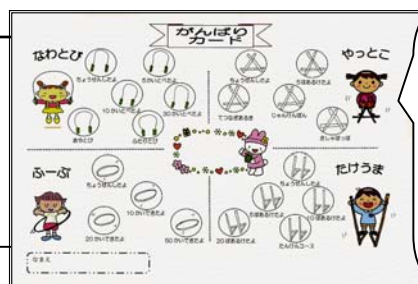
□朝、母親と遅い登園。久しぶりの登園にちょっと躊躇し照れた表情を見せた。

○「よく来たね、待っていたよ」と温かくB児を迎え入れた。B児の気持ちが安定するようスキンシップを取りながら関わっていく。
○B児の朝食の様子や興味を探る発問をしていく。

□B児はしばらく周りの様子を見ていたが、教師の受け入れに安心感を持ち、フープ遊びに興味を示し、挑戦していく。

○「B児さん、すごい！いっぱい挑戦して、フープ回しがこんなに上手になったんだね。」
「うれしいね」「先生は、フープ回しがB児さんのように上手にできないんだよねー。いいなー、先生も挑戦してみよう」とB児の事を大いに認め喜びを共感する。
○クラスの皆に、B児のがんばりの様子を伝え、認めあえる場で教師も心からB児を褒める。
「B児さんの目がきらきらして一生懸命の目に変わっていたね。すごいなって思ったよ。先生もとても嬉しかった。」

□そばにいたC児がB児の傍でまわす回数を数えてくれた。
□何度も挑戦し、100回できると「100回できたー！」「やったーシール貼っていい？」と大喜びで、教師にできた喜びを報告し、カードにシールを貼った。友達も感動し喜びを共感している様子であった。



保育で日常的に使われている「がんばりカード」

□その後、B児は皆で活動する時、以前よりスムーズに輪に入ようになった。また、「せんせい、フープしていい?」「次は、竹馬」と自ら意欲的にめあてを持ち挑戦するようになっていった。さらに、進んで掃除をするようになり生活の様々な場面でも意欲的に園生活を進めていこうとする姿があった。

【考察】

B児のように、登園が遅くなったり休みがちになると、どうしても園のリズムにうまく乗れず本人の持っている良い力を充分発揮しにくくなる。なかなかスムーズに遊び始めることができないB児を教師が丸ごと受容してあげ、心の安心感や安定感が持てるよう援助したことで、心がほぐれB児なりの動きが出てきたと考える。

C児が側にいて一緒に行動を共にし、フープをまわす回数を数えてくれたことはB児の心の支えや励みになった。また、がんばりカードを活用しながら教師に認められたり褒められたり共に喜び合う事で、充実感を味わい成長感や自信につながったと考える。

VII 成果と課題

1 成果

- (1) 廃材などの素材を遊びに利用し、幼児の発想を引き出す援助の工夫をすることで、体を使って意欲的に色々な運動遊びが体験できることがわかった。
- (2) 体を動かした遊びの意図的・計画的な年間指導計画を作成し、保育実践をすることで、興味や関心を持ち、体を動かした遊びが楽しめるようになっていった。
- (3) 幼児一人ひとりの取り組む様子や頑張る姿を、認め励ましたり応援したりする援助の工夫をすることで、幼児は安心感や安定感を持ち、友達と一緒に体を動かして遊ぶ楽しさを味わうことを再認識した。

2 課題

- (1) 幼児の興味・関心の方向性を見つめ、幼児が主体的にかかわっていくための環境や援助の工夫を今後も継続研究していきたい。
- (2) 作成した年間指導計画は、幼児の実態に合わせて保育に効果的に生かせるようにする。
- (3) 家庭での生活の仕方が幼児の生活のリズムに大きく影響することをふまえ、家庭との連携を図り子育て支援の情報発信を行う必要がある。
- (4) 2年保育での発達の道筋を捉えた教育課程を基に、幼児理解をすることができた。今後は小学校以降の心と体の発達を理解し、学びの連続性を踏まえ幼小連携の充実を図りたい。

《 主な参考文献及び引用文献 》

「幼稚園教育要領解説」	文部省	フレーベル館	1999
「事例で学ぶ保育内容 健康」	無藤 隆 監修	萌文書林	2007
「保育内容 健康」	杉原隆, 柴崎正行編	ミネルヴァ書房	1990
「心身の健康に関する領域 健康」	近藤充夫・船川幡夫	東京書籍	1990
「保育内容 健康の探求」	河邊貴子 編著	相川書房	2000
「幼児のこころと運動」	近藤充夫 著	教育出版	1995
「領域別・保育内容研究シリーズ 1 健康」	近藤充夫 著	ひかりのくに	2001
「幼稚園じほう」	全国国公立幼稚園長会事務局		2003・2007
「低年齢児～幼児とのふれあいあそびー手あそび&親子体操ー」	前橋 明	ひかりのくに	2007